

「能海寛師の深層心理を探る」

タイトル	「能海寛師の深層心理を探る」
著者名	隅田正三
雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	第15号
ページ	27-36
発行年	2010.3.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

ISSN 1883-4183



中国僧姿の能海寛

能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）浄蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶応義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあっては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であつたチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心經」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

能海寛の深層心理を探る

能海寛研究会事務局長 隅田正三

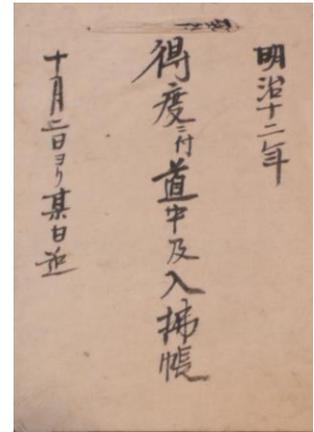
はじめに

今回、『能海寛著作集』が5年余りの歳月を掛け、この程完結した。編集に携わって、全ての資料を丹念に精読することができた。今まで、必要な箇所、項目のみ、つまみ食いの形で、全てのデータの細部にまでは、目を通していなかったように思う。『能海寛著作集』全17冊の総合索引の編集には、1年以上を費やしたが、これまた、予期せぬ、収穫が得られた。7,000項目以上のデータを整理する内に、能海の交友関係の広さ、友人とのディスカッションの中からビジョンが構築されていく様が見えてきた。実際、この論考も索引データのおかげで、9,200ページの中から、リアルに必要なとする項目に辿りつくことが出来た。

今回、「能海寛の深層心理を探る」と題して、いくつかの項目を挙げて論考を進めてみたい。

1. 「得度に付道中受払帳」に見る深層

能海寛が出納記録を初めて、記録したのが、「得度に付道中受払帳」である。この記録によると、明治12年10月2日よりの記録である。この時、兄の法言と2人で、得度に向ったものと思われるが、定かではなかった。しかし、平成18年8月に、浄蓮寺庫裏にある仏壇横の箱の中から証書を巻く芯となる杉の丸い棒に半紙を巻き糊付けされていたものに、「得度御利刀式嘆願」の控えと思われる半紙を発見した。これによると、「私共、先般得度御調査相済候依頼、御利刀式、今以て御沙汰無之候に付、心苦不少候得共、数日、在京仕候處、^{かれこれ}彼是困却之廉も御座候間、何卒至急得度式被成下候様御取計被下度此段連署を以て奉嘆願候也」と記し、石川県鹿島郡上町村本浄寺衆徒中島正玄、島根県那賀郡長浜村明清寺衆徒上野覚十郎、石川県河北郡高松村発願寺衆徒小池田大宣、島根県那賀郡長田村浄蓮寺衆徒能海法言、同村浄蓮寺衆徒能海寛。と記載され、上野、能海2名の印鑑が3箇所押印され、墨で消されている。あとの2名は陰影がなかった。



このことから、判断されることは、石東組^{せきとうそ}(注1)から3名が得度の為、上京していることが読み取れる。また、当然、石東組から3名を引率して上京した、当時の組長^{そちよう}がいたからこそ、こうした、書類手続きが出来たものと思われる。

それにしても、道中の出納記録を見るにつけ、収入の部では、自己資金2円60銭。5名より餞別38銭。母より2円。借入金2名9円。法言より53銭5厘。合計27円58銭5厘。支出の部では、最初に、宿代(14銭)とは、10月2日浄蓮寺を出発すると広島県加計町までが40Kmの距離で、一日の歩行距離であり、加計の香川と称する宿が後年において、よく利用しているから、恐らくは、この宿を利用したものであろう。舟代(18銭)は、翌3日、^{よろがわ}丁川の運河(注2)を経て、太田川の川くだりを行った乗舟料金である。宿代(15銭)は、広島にて、宿泊料金で、翌4日、草履(7銭)を買い、蒸気までの舟料金(4銭)を支払い、広島港から蒸気船(注3)(2円)、により大阪港へと向った。大阪から汽車(20銭)に乗り京都へと向った。

京都では、先ず、下駄(5銭)を買い履物を整えた。知恩院の門の見物代3厘を支払っていること

から、京都で最初に見学したのが知恩院辺りであったのであろう。寛の印鑑がまず必要であり、おそらくは、初めて自分の印鑑（1 銭）を入手したものである。この時の印鑑（径 13 mm）が、前段の「御利刀式嘆願」に押印されているものであろう。印鑑の陰影は、「寛」の一文字が刻印されていた。京都での最初の食事は、ソバ（2 銭）であった。また、鳥を見代（1 銭）、豆代（4 厘）、庭見代（6 厘）とあることから、得度するまでの間に、少しは、京都市内で、見物を楽しんだものである。

得度許可が下りたのは、10月28日であるから、京都では、3週間以上滞在したことになる。地方から出かけて、京都での長期滞在は、経費的にも大変であったと思われる。したがって、早期に得度式をして貰いたいという嘆願に及んだものと思われる。得度時には、得度の礼金（1円50銭）の外に、親鸞御礼の代（1 銭）、白蛇代（1 銭）、数珠代（15 銭）、墨垂代（矢立？12 銭）、得度数珠代（4 銭）、得度記念に撮った写真代（15 銭）、笛代（尺八？1 銭6 厘）、宿料代（3円75 銭）とは、東本願寺関係で、食事付の安価な宿泊施設（食事代程度のもの）を利用したものと思われる。その他の宿泊代（10 銭、11 銭、11 銭）がある。10月下旬に京都を発して、帰りの汽車代（20 銭）は、同じ料金であるので、京都から大阪までの料金と思われる。蒸気代（1 円）が、上京時の2 円に対して半額なのは、何故だろうか。又広島での舟代（5 銭）と渡舟代（4 銭）がある。前者の5 銭の舟代は、宇品港から広島港までと、渡舟代4 銭は、行きと同じ料金であるので、舟付場（慈先寺の鼻）までの料金なのであろうか。柳代（4 回分、3 銭）と称する項目は、昼食代に相当するものであろうか。柳餅代（1 銭）というものが記述されているので、食べ物代であると思われる。広島では、人力車代（6 銭）と茶代（1 銭3 厘）を支払っている。これ等の合計が、10円14 銭5 厘。残金3 円6 2 銭と記録している。以上は、「私金で得度入費払候也 能海法流（注4） 拝」と記している。

「聲明教授本」（50 銭）、「浄土三部妙典」（50 銭）、「同訓点付」（29 銭）の合計1円29 銭については、「右者我輩上京致為時盟約（注5）に書物程にて買求候間左様相可得事浄蓮寺出金也可知」と記していることから、別経理ということになる。明治12年頃の米1石が8円であった。

2. 「E. C. S」の創設に見る深層

能海寛は、明治21年には、The Literature. (文学)。22年には、New Scholar. (新学生)、並びに New Buddhist. (新仏教徒)。23年には、Wisdom and Mercy. (智慧と慈悲) と英語に対する取り組み姿勢が、変遷、進展している。

この変遷の源にあるものは、「英文会」である。能海寛が京都・普通教校、文学寮で学ぶ最中に、寛自身が主宰していた「英文会」と称する48名のサークルである。このサークルは、英文による『新仏教徒』という機関誌を毎週日曜日に発行していた。No 28の機関誌が残っている



「E. C. S」の印鑑

るので、かなり本気で英作文を媒体とした新仏教徒論を展開していたことが想像できる。

このE.C.S.とは、「English Composing Society」英作文会を「英文会」と称していた。会のシンボル印は、直径4cmの中央に日の丸をデザインして、その外側に「Kyoto. English Composing Society」と円形に文字が配列されている。また、毎週日曜日に発行する週刊の『New Buddhist』は、表紙は、予め、活版印刷を施し、発行の都度、号数を書き込む方式としていた。この週刊機関誌は、普通教校内において、原本を持回り、会員の各々が転記していたものと思われる。会費をいくりにしていたかは、不明であるが、当時の会員が寛を含めて、48名であったので、1,000冊程度は、印刷して、会員一人に20冊程度は、先渡しをして、その都度、転記させていたものと思われる。この週刊機関誌は、明治21年10月14日に創刊号を発行して以来、毎日曜日には、確実に発行さ

れた。

22年1月28日には、文学寮本科第2年甲生へ編入となった。こうした過程の中で、寛は、「仏教問答」を著した、オルコット大佐と英文雑誌「ブヂスト」の記者ダンマパーラ（注6）の影響を強く受けている。2氏は、野口復堂の招聘に応じて、明治22年2月に、フランス郵船にて、神戸港へ揃って来日した。特に、ダンマパーラ氏に「ブヂスト」の記事について、寛は面談したと、『世界に於ける仏教徒』の中で述べている。このことが、「新仏教徒」運動の原点になっていると考えられる。

そこで、3月11日に、大学林文学寮と内学院の紛争（注7）が起こり、学業の進まぬ中、遊学の身でない寛は、学資金が欠乏した。すぐさま郷里へ帰国し、石見学場で学ぶ傍ら、檀家総代たちと話し合いを行い、「学資金に付訂約書」を交わして向こう、4年半の学資金270円が保証された。再び、9月14日、京都文学寮の北寮へ入寮した。帰郷中は、週刊誌が、途切れなかったかとの疑問もあるけど、3月30日付、大阪の平山、竹下。4月10日付、大阪の平山、竹下。4月15日付、京都の西依。5月13日付、平山。5月26日付、大阪の竹下から英文による書簡が届いていた。このことは、週刊誌『New Buddhist』の掲載用の記事を寛の元へ送り届けていたということである。従って、寛の手元に残っているNo. 28より以前の第27号までは、キチンと発行していたものと考えられる。恐らくは、5月以降は、休刊としたものと思われる。

明治22年9月26日付、『春秋日記』（注8）によると「英文会の為来る土曜日、会して談し、『アジアの宝珠』及び『十二宗綱要』を人を分けて、翻訳、日本文へ、又英よりの手紙、新聞等を日本に訳し、これを英文会の付属部とし、本趣意は英文を解して作文するにあり。」と述べている。

明治23年10月14日付『春秋日記』によると、「英文会」一周年と記載している。10月22日付の日記によると、「来る27日を以て『新仏教徒』第31号を出すべし。」と記載している。このことを見ると、再上京後、間もなく第29号、第30号を発刊させ、31号を検討していたのであろうと思われる。そして、10月22日の日記には、「英文会を引受ける前田得念、河野始治2氏に書簡を送る」とある。このことは、大学林紛争の煽りを受けて、この際、上京して東京の大学で入学しようとする「英文会」のメンバーが、次々と上京していく中で、寛も学資金の目途が付き、年が変われば、寄留拘束（注9）が解けるので、自分も上京して、東京の大学で学びたいと考えていた。そうした中で、事前に、引継ぎをしたいと考えたものである。

明治23年に東京・慶応義塾に入学してからは、『Wisdom and Mercy』（注10）という、月刊の機関誌を発行した。いわば、東京版の「E. C. S」である。京都時代、既に『Wisdom and Mercy』の原形が『New Buddhist』の中において構築されていたのである。それによると『Wisdom and Mercy』を太鼓橋状に描き、左にライオン。右に像を描いている。この図案は、24年4月のNo. 4から使用している。『Wisdom and Mercy』も、第6号まで、発行された。その後、「英文会」は「経緯会」となり、境野哲海に引き継がれ「仏教」へと進展していくのである。当初の「新仏教徒」の基本精神は、そのまま引き継がれていったのである。

3. 「夏期休暇中の国内旅行」に見る深層

彼が何故、比叡山、身延山^{みのぶさん}、筑波山などの深山幽谷を跋涉し、富士山にも登頂したのか。何故、伊豆七島めぐりをしたのか。疑問に思っていたことが、最近になって、理解できるようになってきた。

『世界に於ける仏教徒』第13章「巡礼」、に記述しているように、先人、高僧の遺徳を得るために聖地を巡礼する



登山時に入手した富士山の図

必要を挙げているが、寛自身は、京都普通教校時代から、夏期休暇中を利用して、聖地巡礼を實踐していた。先ず、伝教大師の高徳を慕い比叡山に参詣し、日蓮上人の威徳を慕い身延山に登り、板敷山を越え、親鸞聖人の旧蹟、真宗の開闢の地である上州稲田の草庵に詣でた事などは、寛が實踐した、聖地の巡礼そのものである。寛は、「信後の行」を提唱し、実践を行ってきた。現代流でいうと「有言実行」そのものである。

富士山登頂は、慶応義塾において、w・ウエストンとの出会いによって、触発され、チベット探検を想定して体験のために登頂したものと思われる。そして、伊豆七島めぐりは、中国での長江遡上を想定してのものではなかったろうか。伊豆紀行の前に、水泳の練習をやり、4通りの泳ぎ方をマスターしていたもの用意周到であるといえよう。

これらの体験が、中国での巡礼探検に活かされていったのである。

4. 「履歴書」に見る深層

能海寛の履歴書は、次の7種類が残されている。

① 明治22年1月28日、京都普通教校から大学林文学寮へ偏入学する際に記載された履歴書の控である。『明治元年5月18日生。明治8、9年、小学通学。明治10年6月以来広島に於いて、漢書を脩すること4ケ年。同18年9月以来数ヶ月間広島在学。明治19年3月以来、京都普通教校に於いて左の書籍脩読す。英宗七出家集、ヘスチング伝、クライブ伝、博物、地文、物理、初歩化学、歴史、ギブー文明文、代数、幾何等なり。右の通り御座候也。1月13日 能海寛 以上。』

(著作集 ③50) 京都普通教校での学習内容が分かる上級学校への偏入学用にもちいた履歴書である。

② 明治23年、慶応義塾入学時に記載されたもので、「墨染集」の中に収録されている。『◎得度、明治12年10月28日。◎學術、明治11年より13年に至る広島小教校在学。明治18年、再び広島教校入学。明治19年3月より京都本派普通教校入学。明治22年同派文学寮に……。』

(著作集⑭590)

22年までの記載であるので慶応義塾へ入学する時に使用した履歴書の下書きと思われる。

② 明治27年1月8日、「遊学資料萬覚」に記載されている「履歴」によると、『◎明治元年9月2日出世す。同10年6月12日、広島小教校に入る。年齢8年10ヶ月。同13年の頃京都教校へ合併の時退く。この時の事明白ならず。明治12年11月28日得度す。年齢11年2ヶ月。7、8歳の頃より専光寺に養育せられ14、5歳の頃帰る。明治15年、16年、17年、18年、22年、各夏石見学場に出づ。明清寺、浄慶寺、専竜寺、正楽寺、専教寺、正万寺。明治18年9月9日、専光寺に行き円海師に謀り11日帰り、13日、兄と室田屋にのみ言い置き専光寺に至り、14日、広島に出て野田に宿、16日、1丁目教校に入る。同12月22日、御坊に引き移り滞在し、年を越す。明治19年1月16日、御坊を發して、帰路、17日、専光寺着、19日、浄蓮寺に帰着。潜に上京の仕度を整へ、広島へ再出と申して、僅か4泊して、23日、専光寺に至り、25日發、26日、広島御坊に着す。29日、宇品にて乗船。31日、京都に着。桑門氏の宅に寄寓す。暫時三条の塾に通い2ヶ月間、食客を勤め3月1日、2日入学試験。西普通5日本願寺教校寄宿舎に入り、同19日、本舎に入る。明治19年3月5日、普通教校に入り、6月コレラ病流行し、休業となり、11日に帰路につき、15日、6日の頃帰着す。明治19年9月9日、再び上京。15日、同く、普通校に入舎す。20年京都滞在。21年夏は、摂州吹田村に避暑。22年3月11日、資金の都合によりて、帰

国す。彼岸を専光寺にて勤め、23日頃帰寺す。この夏学場に出つ。明治22年9月5日、再び、学費を檀家とはかり、後継たるの約束にて、4ヶ年半の学資をたのみ出発す。これ予が一生不自由となるの根元なり。京都文学寮滞在。この時、校治らず、且つ、外の事情よりして、同年12月17日、発して西依、松島と同道、東京に趣く。明治22年冬以来、東京にて、滞在中、23年春、慶応義塾に入り、秋去り、24年1月以来、哲学館に入り、25年同校、26年6月、同校終えて、7月21日、出発、鎌倉、岡崎、名古屋、二見浦、京都、広島を経て8月7日無事帰山す。』(著作集 ⑫95)

生年月日が9月2日とある。何故であろうか。出生届を逆上って付けることがあったのだろうか。哲学館卒業後に、母からこのことを聞かされたのだろうか。そういえば、『得度に付道中受払帳』の奥書で「11年2ヶ月」と付記していることを思えば、既に、寛は幼くして承知の上で、私的な「游学資料萬覚」と公的な履歴書は、戸籍上との使い分けをしだろうか。『得度に付道中受払帳』は、12年11月に京都から帰ってきてから清書したものであるから、9月2日生れということで、計算上は成り立つのである。

石見学場のデータが記載されて、6ヶ寺が記されている。この履歴は、哲学館卒業後、故郷において、過去9年間の学資金の使途を記載した資料で、より詳細な回想した履歴を記述しており、能海研究には欠かせない資料である。

③ 明治27年、最初の西藏探検の上申時に、下書きされた履歴書と思われる。手帳記録④に書き込まれている。『島根県石見国那賀郡波佐村、真宗大谷派浄蓮寺第12世法幢長男、能海寛、明治元年9月2日生。◎明治10年広島教校入学。明治13年退学。明治15年、16年、17年、18年、22年国元学場入学。明治18年9月、広島教校入学。明治19年3月、京都本派普通教校入学。22年、徴兵検査甲種合格。22年12月まで在学、英学、普通学、仏学研究。23年、東京慶応義塾入学。24年、東京哲学館入学。26年7月、帰国まで在学、仏学研究。在東京にて余暇を以て南條師宅に於いて梵学を学ぶ。26年、帰国以来在寺、仏学独習兼寺務勤居候。明治26年11月『世界に於ける仏教徒』著述出版致候。賞罰無之。禁酒、明治19年以来。』(著作集 ⑩313)

前の③の履歴データと同じ9月2日生れとしている。手帳に書き込まれているので、下書き用の履歴書ということである。禁酒を付け足していることにも注目したい。

⑤ 明治29年、東本願寺へチベット派遣僧としての嘆願書に添付する為に書かれたもので、『「履歴書」島根県石見国那賀郡波佐村、院家地浄蓮寺衆徒、能海寛、明治元年5月18日生。◎明治10年より同13年迄、広島小教校在学、予科卒業。同12年10月28日、得度。同14年より18年迄、父謙信より漢籍並に、宗乗を学ぶ。同15年、16年、17年、18年、及び22年の5夏、石見学場並びに講習場縣席(正信偈、和讃、本願抄、観無量寿経、観心賢夢妙等)。同18年、広島教校卒業。同19年3月より23年2月迄、京都普通教校及び文学寮にて、普通学、英学等を学ぶ。同23年9月より26年6月迄、東京哲学館にて哲学を学ぶ。◎學術 16年5月29日、第4級卒業。19年7月普通高等科入学。20年3月、依願退校。20年3月より小栗栖香頂に就き任倫註を学ぶ。19年7月より吉谷覚寿師に就き観心覚無抄、□□□□抄、因明大疏、□□□を学ぶ。20年1月より小永井小丹に就き文章軌範虫記、□□八大家、□□書を学ぶ。21年より3ヶ年間哲学館館外員となり、哲学を学ぶ。21年より2ヶ年間、梵・英語を学ぶ。同年同月より東京英語学校にて英学を学ぶ。』(著作集 ⑩412)

この履歴書は、仏学関係が後段に纏めて記載されているので、28年5月の住職試験(整理献金)時のものと思われる。④の履歴書を、より推敲して、仏学を書き加えたものである。

⑥『「履歴書」島根県石見国那賀郡波佐村、真宗大谷派院家地浄蓮寺衆徒、院家 能海寛、明治元年5月18日生。◎明治10年より13年に至る、広島小教校在学。同12年10月28日、得度。同15年、16年、17年、18年、22年、国元学場懸席致候。明治18年8月、広島教校入学、12月退学。同19年3月、京都本派普通教校入学、爾来22年12月まで在学、予科及本科2年卒業、退学致候。同23年、東京哲学館入学、26年7月全科習業帰国。同24年より、26年に至る、哲学館余曜を以て南條氏宅に於いて、梵学に着手仕候。同26年11月、『世界に於ける仏教徒』著作候。同27年、28年、兩年、在国、本山整理金の為尽力仕り候。同28年5月、整理献金に付、院家出仕御賞許払成日。◎賞罰 別に無之候。29年3月上旬より、東京南條氏宅に於いて、梵学及西藏国文独習致居候、蔵行発心(注11)は、明治25年12月にして、爾来、東京図書館等に於いて調査致居候次第にはせ候。右の通無相違候也。』(著作集 ⑫26)

この履歴書は、明治29年5月7日付、本山執事渥美契縁宛に西藏派遣僧の嘆願書に添付して提出した、履歴書の控えである。これによると、本山への貢献度をアピールして、学業と西藏研究、サンسكريット語研究を書き表している。本山白河問題(注12)が過激の最中、寛は、中立的な立場を貫いたのもチベットへ向けた大きな夢の目的達成の為があったのだろう。『世界に於ける仏教徒』の著書が、西藏行きを決定させる大きな原動力となったことは、述べるまでもないであろう。

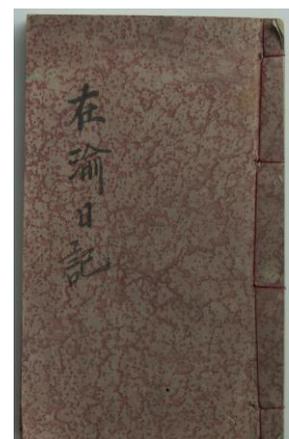
⑦ 明治31年頃の「履歴書」。『◎明治元年5月18日生。明治10年より13年迄、広島教校在学予科2級卒業。12年10月28日、得度。14年以来18年迄在国父より宗余乗及漢籍教授。15年(明清寺)、16年(専教寺)、17年(正楽寺)、18年(正万寺)、及び22年(浄慶寺)の5夏、石見学場、縣席。18年9月広島教校入学、12月退学。19年3月京都普通教校入学以来22年12月迄在学、英学、普通学を学ぶ。21年徴兵検査合格。23年、東京慶応義塾入学、同12月退学。24年1月、東京哲学館入学。26年7月卒教、帰国。24年1月以来、26年6月迄、南條氏に就いて、梵学を学ぶ。且つ、25年冬より西藏国調査に従事する。26年11月『世界に於ける仏教徒』と称する1冊子著述、東京哲学書院にて発行。26年8月以来、29年2月迄在国。但し、27年渡清準備の為、上京中、日清回戦となり帰国す。28年4月整理献金に付、院家出仕賞許。29年3月以来、東京南條氏宅に於いて梵学専門研究。側に、西藏語及支那語研究。◎明治19年、創立以来、京都『反省雑誌』。29年3月以来、東京『仏教雑誌』。30年3月以来、東京『東洋哲学雑誌』。不堪関係致居候。◎賞罰無之。』(著作集 ⑩394)

この履歴書は、明治31年10月に本山へ西藏派遣僧として、申請手続きの際に提出した、履歴書の下書きと思われる。学業以外の幅広い活動状況を網羅している。これら7つの履歴書を精読することで、国内における寛の大方の足取りを辿ることができるのである。

5. 「思想の変遷」に見る深層

「思想の変遷」は、明治33年12月22日『在渝日記』の中に記述されている文献で、第3次探検に赴く前に重慶で、記述したものである。先ず、前文を掲載して、その変遷を辿ってみたい。

1. 学問は、何の為に学ぶべきものや。
皆、人の学ぶ故に、己れ又学ばざるべからずと考へし時代。
2. 普通学の必要。
今や、世間一般の学をなす。我が仏教の布教に任あるもの普



通学。即ち、小・中・大の学を学ばずは、専門の仏学も応用する不能べしと考えし時代。

3. 欧米布教策。

今や欧米、仏教を求めて止まず。これには、第一支那訳の経文を翻訳せずしあるべからずと考えし時代。

4. 英文研究時代。

同志を集めて「英作文会(イングリッシュ・コンポジショナル・ソサイチー)」を結び「文学(レクチャー)」と称する、毎週、『英作文集雑誌』を校内発行し、又朋友間、手紙に英文を用い、尚東京に移りても、『智慧と慈悲(ウイズ・アンド・マーシー)』と称する「英文集」を毎月、造りて英文に志し、又少々経文を訳せるの時代。

5. 翻訳には、梵学の必要を感じたること。

少しにても、英文に仏教経文を訳せんときは必ず梵音出て来たり。梵語を解せずは、第一、其綴すら困る。是非、この学は少しく学ばずは、目的達し難しと考えし時代。

6. 梵文経典の不足を感じし時代。

少しにても梵語を学び、梵文経を見れば、益々、其原文の多からんを望む。今伝う梵経は、僕が10部ばかりに過ぎぬ。益々進んで求むるを要す。特に三部の一なる観経なし。量等の原本探るの必要あり。

7. 自動的東洋学研究必要。

西洋に東洋学ありて、東洋人よりも却って精し。特に仏徒よりも欧米学者、梵学に熱心研究せり。自動的東洋学研究必要なり。特に、仏徒には梵学の自動的研究を要す。然るに、甚数甚少し。又欧米梵学の大儒梵本を以て、漢訳経を批評す。自ら進んで彼を厭倒するに非ずんば、欧米に仏教の伝道困難なりと考え。世に伝う原書はニポールより多く出て、印度には、已に多く絶へたり。然らば、西藏に入らば、古来数千年来、伝来せる、梵本経なしとせず。宜しく行て探索すべしと。

7. 西藏行の感念。

東洋の秘密文庫。世間未知の図書館と望みを属せらるる西藏国前後蔵より薩迦の経蔵には我々の求めて止まざる東洋学の古木なを秘蔵し居るも不計。今迄は友人に西藏行を望み居りしも、今や東洋問題、特に中央亜細亜問題、年々通過し来る。我は不要多錢単騎旅行せんと。自ら企てたり。屑々と延引せば、却って外国の為に先をとられんと恐れたり。

9. 西藏学の必要。

西藏漠遊の途に上りて段々と土人等に遮られて。暫時、巴塘及び打箭炉に滞在。少々西藏経文を得て研究せし処、泉外にも、其訳文の我々平生望み居る梵語原文に近きより、今は、英文よりも梵学よりも即ち、西藏文研究の愈々必要なるを感ずるに至れり。

以上、9項目に分けて、考えを述べている。

①「学問は、何の為に学ぶべきものや」については、まだ学問の方向性は見出さないまでも、勉強しなければならないと自覚しているころであり小学校へ2年間学んだ後に、広島小教校へ入学して、より多くの学友に翻弄されている頃の思想である。

②「普通学の必要」は、明治18年に広島教校、19年より京都普通教校で学ぶ中、英国のセツパー教授(夫妻)に英学を学び、これからの宗教家は、広い見識が必要と考えたのであろう。セツパー夫妻の私宅を訪問して洋食をご馳走になり、ハッピー、ハッピーと記載している。この頃から寛は、名刺に日本語にローマ字併記しており、元々、寛(Yutaka)を(Kuwan)とローマ字表記したのも、

外国人に対して、発音の通りが良かったのであろうか。宗教家としての布教活動は、庶民が相手であり、専門用語を普通学の知識で分りやすく説教するという思想である。

③「欧米布教策」は、京都普通教校に於いて「反省会」（明治19年）が創設され、「海外宣教会」（21年7月）、「欧米仏教通信会」（21年8月）、「」と波及して仏教の海外宣教活動が活発化してきた。そのような中で、寛は、仏教を英語による発信を考え、明治21年10月に、E. C. S（英文会・48名）を立ち上げ、『New Buddhist』という週刊機関紙を発行したのである。この英文会の立ち上げは、セppard教授との出会いによって、感化されていったものと考えられる。また、『仏教問答』（オルコット大佐著）がたちまち世界各国において、自国語に翻訳されたことに、関心をもったことも事実である。

④「英文研究時代」は、京都普通教校と文学寮時代のことで、「The Literature」（文学）を発信した年月は分らないが、21年9月までは、この「The Literature」というタイトルで、英文集が発行されていたものと考えられる。21年10月からは、『New Buddhist』というタイトルで、週刊誌を発行して、「新仏教徒」運動を活発化させた。23年に、東京へ移ってからは、『Wisdom and Mercy』というタイトルに変更し、月刊とした。これらの推移を見るに、寛の発想力と着眼点、そして、友人を吸引し、束ねる能力の卓越していることに感心するものである。

⑤「翻訳には、梵学の必要を感じたこと」は、24年1月より、哲学館で学ぶ側ら南條博士宅で梵学を研究する中において、仏典を英訳する時に、どうしても、漢訳經典のみでは、翻訳不可能と感じた。サンスクリット經典によるサンスクリットの文字、発音による正しい翻訳がしたいと強く感じている時代である。

⑥「梵文經典の不足を感ぜし時代」は、中国においても、玄奘三蔵がサンスクリット經典によって、漢訳經典を作ったのであるが、元のサンスクリット經典を眼にすることが出来ない。世の中にある經典は、あまりにも少ないことを嘆いている。翻訳上、原典であるサンスクリット經典の入手が肝要だと強く感じている時代である。

⑦「自動的東洋学研究必要」は、欧米の仏教学者は、梵經典によって東洋学（仏教研究）をしている。同じ仏教徒にあるものは、東洋学研究は必然的に行うべきで、仏典翻訳上において、西藏に存する西藏經典がインドより、千年以上前に伝わり、梵經典は無しとせず、実際に行って探索して、その有無を見極める必要があることを述べている。

⑧「西藏行の感念」は、19年10月にチベット探検を公言して以来、21年の東温謙の渡航の際に西藏探検の必要を述べ、26年7月、鎌倉・二見ヶ浦において、日本仏教青年会議で、西藏探検行を講演した。これらの一連の行動の中で、明治25年12月、「履歴書」や「予と西藏」で述べているように、自らが西藏探検に赴く決定をしたのである。これまでは、インド、セイロンへ仏教研究に赴いた友人、知人にサンスクリット經典の請来を期待していたのである。寛自身が、檀家の抛出による学資金で勉強している身の上で、到底、自らは行けないと考えていたのであろう。しかし、25年12月に、意に反して、決断したのは、⑤、⑥の項目の経過によって、決断したものと思われる。また、『世界に於ける仏教徒』第9章「仏教国の探検 西藏探検の必要」で述べているように、「今日、一日も西藏探検の猶予すべからず」とし、北からはロシア、西からイギリス、南からフランス、東から中国が退けんとして中央アジアハミル高原は一大戦場となるおそれがある。千年の伝統を持つ文化も廃れるだろう。同じ仏教国として、仏典の保護をしなければならない。という強い思い立ちが決断させたものである。しかし、決断後において、にわかに、西藏探検行に参画する者が出はじめたけれども、一旦、決断したからには、後には引けないと述べている。

⑨「西藏学の必要」は、明治32年11月より33年4月までの半年間、ダルツェンドに滞在して、

サンスクリット経典、西藏大蔵経、ボン教経典を入手して、梵・英・蔵・漢の4ヶ国語に翻訳して、南條博士に届けた。この時の翻訳過程において、強く感じたものは、西藏語研究が一番大切であると最終の結論を述べているのである。

これ等の一連の思想の変遷は、第3次探検で雲南省へ向う前に是非とも書き残して置きたかった、寛の思想変遷（遺書ともとれる）の記述である。

6. 「世界に於ける仏教徒」の出版経緯に見る深層

この著書が出版されるに至った動機は、24年1月13日、義妹のスエが故郷で病死し、葬儀に立ち会えなかったこと。同年7月に身延山、富士山へ登頂して、悲運に決別して、西藏探検に赴く決意をしたことに始まる。義妹が亡くなつてから、半年間は、「夏瘦せと 人にこたえて 涙かな」、「無き人の 小袖を今や 土用ぼし」、「やがて死ぬ 景色は見へぬ

蟬の声」等の歌にも見るように、人生のはかなさを体験し

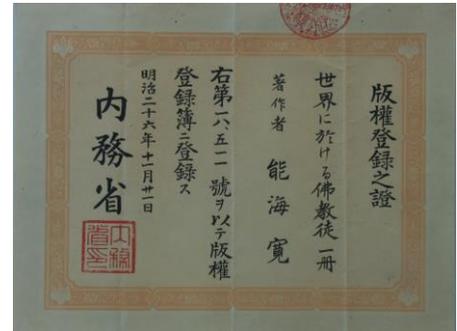
て、富士山頂において、「富士の嶺に 去りなき月も 見る人の ふく笛の音も いまは絶へなる」と、尺八を吹き、これからの人生を考えたのである。そして、下山後の行動が西藏研究であった。この著書は、2年間、精力的に研究して書き上げた貴重な論文である。

この本は、東京の哲学書院から出版された。出版社へ委託販売させ、全国の主要都市である大阪、熊本、博多、名古屋、長岡、金沢、富山の各書林へ10部ずつ預けていた。また、書院からの諸経費の計算書によると、著作権料90銭、用紙代（千部）14円4銭、印刷費14円17銭、千部印刷の内600部製本（400部は印刷のまま）3円、浜田までの運賃70銭、表紙500部代1円3銭7厘、表題彫刻代25銭、同揮毫料10銭、雑誌広告『仏教』などへの広告料82銭、という記録が残っている。頭金20円は発注時に納めたので、委託販売から半年間で、97部が売りさばかれた。都合差引で8円9銭5厘が不足金として請求してきた。

この中で、特に、目を引くことは、著作権を取得し、新聞広告を3誌に掲載し、全国販売をしたことである。また、製本していない400部については、なるだけ経費を掛けないという考えからくるもので、当時の檀家390戸に相当するものであることから、寛が自ら製本して、学資金の拠出で教育して貰ったお礼に、檀家に一冊ずつ配布したものと思われる。大胆で細心の心配りのできる人物であった。

【注釈】

1. 石見国の東側に位置する真宗大谷派の寺院の組織を「石東組」と称している。
2. 現在の広島県山県郡安芸太田町加計にある太田川の左岸に注ぐ支流の名称で、本流から500mの区間が運河となっており、^{よろがわ}丁川の右岸に船着場があった。寛は、ここから川舟を利用した。
3. 小型汽船のこと。
4. 法流とは、能海寛の法名である。
5. 固い約束のこと。
6. 1,864年、セイロン（スリランカ）の生れ。英文雑誌「ブヂスト」の記者で、仏教の復興を図った先駆者である。ブラヴァッキー・オルコットの「神智学協会」に心酔して、1,889年「神智協会」をつくる。同年2月9日、野口復堂の要請に応じてオルコット、ダンマパーラの2氏は神戸港へ入港した。そして、全国で、講演会を行い、聖地ブッタガヤの復興と仏教徒の連携を提唱



版權登録之証

- した。1,891年、オルコット大佐とブッタガヤを訪問する。1,933年没す。
7. 明治21年12月、大学林例が設置され、普通教校、大教校は閉校となり、普通教校は文学寮に、大教校は内学院となった。文学寮生は元々禁酒運動を提唱したが、内学院生は、それを詰った。互いの学生は、気質が違い、食堂を舞台に学内紛争となった。
 8. 寛は、閃きによって、即実行に移す人であった。恐らくは、『日本之教学』第2号に寄稿している早稲田大学の西祝氏の「孔子の教え」の記述を読み、「春秋日記」というタイトルを付けたものと考えられる。『春秋日記』は、22年8月から書き始めている。
 9. 明治22年3月11日、学内紛争が起った後、寛は学資金調達のために郷里にいた。5月30日、文学寮から書簡が届き、「当地、寄留人として徴兵応じ当地域の補充員規則により12月までは、当地を去ってはならない。」と寄留地の拘束通知が届いた。この拘束が解けた翌23年に東京慶応義塾へ入学した。
 10. 直訳すると『智恵と慈悲』ということである。「智恵に2種類ある。『世智』と『出世智』也」という。東京での英文会員は、慶応義塾4級生を中心に、平山、竹下、綿谷、垣山、清谷、梅田、笠原、橘、宮、川口、堀、上田、荒木、後藤、吉田、加藤、島津、久富、橋本がメンバーであった。
 11. 「予と西藏」に記述されている。
 12. 「白川問題」は、本山の渥美派と改革派の間で、改革論で論争が起こった。改革派は、京都白川村に「教界時言社」を設立して、明治29年10月30日に『教界時言』創刊号を発刊。この改革派は、白川派と称された。12月29日、渥美契縁氏は、執事を失脚した。

【参考文献】

- 『能海寛著作集』第1巻、「能海寛業績全記録Ⅰ」（2005年）
『能海寛著作集』第3巻、「春秋日記」（2005年）
『能海寛著作集』第7巻、「能海寛往復書簡Ⅰ」（2007年）
『能海寛著作集』第8巻、「能海寛往復書簡Ⅱ」（2008年）
『能海寛著作集』第10巻、「手帳記録と第一次探検記録」（2008年）
『能海寛著作集』第12巻、「嘆願書と上申報告書」（2009年）
『能海寛著作集』第13巻、「英文日記と機関紙（智恵と慈悲）など」（2009年）
『能海寛著作集』第14巻、「フィールド・ノートなど」Ⅰ（2009年）
『能海寛著作集』第15巻、「フィールド・ノートなど」Ⅱ（2009年）
『普通教校人士』（明治23年11月刊）